

# 余徳

吉岡省二

月々に月見る月は多けれど——、旅先で観る月はことさら。満月ならなおさら。旅にあれば、いつもとは違う場所、違う時間が、気持ちを高めてくれるから。

寂聴さんが旅先でご覧になつた月に、印象深い隨筆がある。ポルトガルのリスボン到着時に、「『花に問え』で谷崎潤一郎賞を受賞」の報を受け、その夜の満ち足りたお気持ちを、ホテルから観た中秋の名月に象徴させたものだ。冒頭に引いたよみ人知らずの歌にもある、名月を愛でつつ、来し方にも思いを馳せたとか。

に上がりたての頃、近所で彼の淋しそうな後ろ姿を見かけたという。日課にしていた墓参りの帰り道だったようで、そんな彼の最晩年の悲哀を、寂聴さんは人形淨瑠璃『モラエス恋遍路』に著された。リスボンへの旅も、後年のこの作品に繋がる、モラエスの取材であった。

寂聴さんのお話や作品をきつかけに、私もモラエスに興味を持ち始めていたところ、徳島でその人形淨瑠璃が上演されると知り、羽田から朝一番の飛行機で向かつた。

心待ちにしていた舞台の幕が開く。細やかな人形の動きに目を見張り、その世界に引き込まれていった。緩やかに耳に届く謡いに、阿波踊りの囃子。なんだか夢のよう…。? はつ!と我に返ると、舞台はクライマックスに。日々の

寝不足がたたり、居眠りをしてしまつたのだ。これを観るためにやつて来たのに、本当に悔しい。

しかし以前、このように「舟を漕ぐ」ことは、決して悪いことではないと教えてくださつたのは T 氏。以前勤めていたホテルで担当した、寂聴さんの『源氏物語』をテーマにした企画にご出演いただいたことから、ご厚誼を賜つた。

T 氏は代々、雅楽を担う楽家。氏もかつて宮内庁式部職楽部で首席樂長を務められた。少年時代には、マッカーサーの前で舞楽を披露されたこともあり、当時の写真を見せていただいたことも。楽部では宮中晚餐会で洋楽の演奏も担当ため、子供のころから両方をみつかり勉強させられたといふ。

「我々音楽家は、聴く人が居眠りをするような演奏をしなければならないんです。」

「え？ 失礼な！ って怒りたくなりません？」と私。

「心地よくないと寝られないでしょ？ うつらうつらされるような演奏を、と先輩からも教わつてきました。」

企画の打ち合わせ段階でのこと。T 氏とご一緒していた

エレベーターに、偶然、寂聴さんも乗つてこられた。お引き合させしなければと思う間もなく、笑顔で会釈を交わされるお二人。それまでお二方とも「面識がある」とは一言もおっしゃらなかつたのだが、その奥ゆかしさに感じ入るとともに、自身のおこがましさに恥じ入つたのだった。

モラエスもお二人のよう、社会的な地位はあつても、驕り高ぶるような人ではなかつたようだ。数学と語学の成績が抜群で、海軍士官学校を首席で卒業後、軍人に。フランス語、英語、中国語、日本語に堪能な上、後には文筆活動まで。そんな能力をひけらかすことなく、来日以降は外交官となつた。京都御所での信任状捧呈式では、両陛下に謁見を賜つた記録も残る。

信任状捧呈式は、外国の大使（または公使）着任にあたり行われる儀式だが、前述のホテルはかつて、皇居でのその儀式に向かう馬車（もしくは乗用車）の出発起点となつていた。式のあと、大使はホテルに戻り、ゆっくりお茶などを楽しまる。現在の起点は東京駅に変わつてしまつたが、かつてのその車列と同じルートで、寂聴さんも参内さ

れたことがあつた。文化勲章の親授式だ。記者会見なども終えてホテルに戻られた表情は、なんとも満ち足りた笑顔だつた。

あれから、随分と時が経つた。

寂聴さんご遷化ののち、ご在世なら満百歳にあたる日に、また徳島で『モラエス恋遍路』の上演があり、今度こそ！ トリベンジに向かつた。

こんなに強い気持ちで臨むのに、またまた眠気が襲つてくる。座つて觀てているだけなのに、本当に必死だ。でも仕方がない。謡い、奏で、演じる皆さんが素晴らしいのである。それでもなんとか念願叶い、すべてを觀ることができたので、「次に進んでよし」という及第点をもらえたような気がした。

街の広場には、白黒二色で描かれた波模様の石畳が広がつていた。昔、マカオの広場でも同じ模様の石畳を見たことを思い出す。大航海時代を切り拓き、洋の東西を繋いだかつての海洋王国に想いを馳せ、からりと乾いた風に吹かれながら、のんびりと街を歩いた。

翌年、新型コロナによる行動制限も大幅に緩和された夏休みに、ポルトガルへ。ヨーロッパ最西端の岬もあるこの国を、最果ての地と聞けば物悲しいイメージも浮かぶが、実際には明るい日差しにあふれ、海の幸に恵まれ、美味しワインもたくさん。モラエスが寄稿していた新聞「コメ

ルシオ・ド・ポルト」が発行されていた北部の街、ポルトから入り、バスで町々を巡りながら南へ。修道院を改装したホテルなどに泊まり、その土地のワインや料理を楽しみながら、モラエスの生まれ育つた街、里斯ボンへと至る。

の果てで、孤独のうちに没する。

人生も何事も、光が当たれば影も生まれる。とはいえ諦念とは簡単にはくくれない、何が彼をそうさせたのかは、誰にも分からぬ。家の付近をゆっくり歩いて、また同じ道を戻った。

ポルトガル人特有の情緒を表す「サウダーデ」という言葉がある。そのニュアンスを解するのは難しいらしいが、「孤愁」と訳され、「また会いたい」「あのころに戻りたい」といった感情が込められているとか。悲しい記憶よりも、良い思い出を懐かしむ方が近いのだろうか。

そんなサウダーデの感情を込めて歌う、国民音楽の「ファド」は、運命というその語の意味どおり、哀愁を感じる旋律、切ない歌声が、この国の歩んだ光と影を感じさせる。震災などで国力が低下し、財政的にも維持が難しくなった植民地から、現地の人々の苦しい身の上を歌った音楽が逆輸入され、独裁政権による抑圧の時を経て、現在のスタイルとなつたそうだ。

旅の最終日、そんなファドを聴けるレストランへ。バス

で向かう途中、ホテルの看板に目が留まる。寂聴さんがリスボンへいらした時に滞在されたホテルだ。黄昏時、多くの車が行き交う喧騒の中、——ここから観た月だったのか……。と、窓の外に流れる街並みを、ぼんやり見送りながら想つた。

よく冷えた白ワイン、美味しい魚料理をいただいたところで、演奏が始まる。憂いを帯びた男性の歌声、切々と歌う女性の歌唱が、深夜まで続く——。

店を出たら、偶然にも空には満月が皓々と輝き、よぎる雲もない。歌声も耳に残り、旅愁が胸に沁み入る帰り道。秋も近いようだ。

人が月を見るときは、心静かに、何かに想いを馳せていい。寂聴さんもリスボンの名月を愛でながら、かつて愛した男たちのことを想つたと吐露している。モラエスも日本で月を仰ぎ見て、二度と戻ることのない、ここリスボンで過ごした若き日々、日本で愛した二人の女性を想い、サウダーデに浸つていたのだろうか。

この年、モラエスの著書『おヨネとコハル』が上梓され、百年を迎えた。